

児童期中期におけるアタッチメントの安定性を測定する試み： カーズ・セキュリティ・スケール (KSS) の日本語版作成

中尾 達馬 村上 達也
(琉球大学教育学部) (筑波大学人間系¹⁾)

本研究の目的は、児童期中期におけるアタッチメントの安定性を測定可能なカーズ・セキュリティ・スケール (KSS) の日本語版を作成することであった。調査対象は、小学4年生から6年生の848名(平均年齢10.2歳, 男児420名, 女児428名)であった。本研究では、まず、KSSが性別や学年によらず1因子で構成されているとみなせるかどうかについて検討を行った。次に、KSSの信頼性について、内的整合性と再検査信頼性(3ヶ月)を確認した。最後に、KSSの妥当性については、以下の2つの方法で検討を行った。1つ目は、KSSは、アタッチメントの安定性と理論的な関連性・無関連性が想定される自己知覚尺度(i.e., 全体的自己価値感, 友人関係評価, 運動能力評価)と、どのような関連性を持つのか、であった。2つ目は、KSSは、8ヶ月後の共感性, 友人関係良好度, 孤独感, 問題攻撃性を予測し得るかどうか、であった。これらの結果は、我々の仮説を支持していた。以上のことから、本研究で作成した日本語版KSSは、信頼性と妥当性という点において、十分な心理測定的属性を備えた尺度であるということが示唆された。

【キーワード】アタッチメントの安定性, 児童期中期, 日本語版KSS, 信頼性, 妥当性

問題と目的

Bowlbyがアタッチメント理論の考え方を世に問い始めてから、そして、Ainsworthがアフリカのウガンダやアメリカのボルチモアで母子の自然観察を行ってから、既に50年以上の年月が経過している(Cassidy, 2008)。しかし、生涯発達におけるアタッチメントの重要性が認識され、乳幼児期や成人期について、膨大な量の研究が積み重ねられていく中で、児童期のアタッチメントについてのみ、知見の集積が遅々としていた(数井・遠藤, 2005; Kerns, 2008; Kerns & Richardson, 2005)。このことは日本においても同様であり、児童期のアタッチメントについては、研究が散在するのみで(e.g., 本多, 2002; 松浦・北川, 2010; 村上・櫻井, 2010, 2014; 豊田, 2011)、実証的知見が着実に積み重なっているとは言い難い。

児童期のアタッチメントを研究することは、アタッチメントの生涯発達のプロセスやメカニズムを考える上で非常に重要である。なぜなら、乳幼児期と青年期・成人期の間にある児童期だからこそ、そこには他の発達段階にはない特色が潜んでいるためである。たとえば、児童期においては、社会的世界の広がり、社会的認知を含んだ認知的発達(e.g., メタ認知, 多重的感情の理解)、第二次性徴の開始に伴う身体的変化に伴い、親子関係にお

けるアタッチメントに変化が生じる可能性がある(Kerns, 2008)。具体的には、子どもの自立性の高まりに従い、児童期においては、親子間の物理的・心理的接近性の制御は、はじめはその責任が主に親側にあったものが、徐々に2者による協同調整(co-regulation)へと変化する。そのため、養育者側においては、感受性(sensitivity)というよりはむしろ、スーパーヴァイズ機能が重要となる(Kerns, 2008)。さらに述べるならば、Bowlby(1969/1982)は、アタッチメントにおける目標修正的協調性(goal-corrected partnership)は、3歳以降に形成されると想定していたが、この関係が顕著となるのは、主に、児童期中期だと考える研究者もいる(Waters, Kondo-Ikemura, Posada, & Richters, 1991)。

児童期におけるアタッチメントは、アタッチメントの「表象レベルへの移行」(Main, Kaplan, & Cassidy, 1985)の詳細を明らかにする上でも重要である(Kerns, 2008)。なぜなら、乳幼児期においては、個々の関係性の質に応じた行動パターンという形で組織化されていたアタッチメントが、児童期・青年期における認知発達を経て、成人期においては、「アタッチメントに対する心的状態」(state of mind with respect to attachment; Main et al., 1985)として、アタッチメント関係全般に対する一般的な表象になると想定されているためである。たとえば、乳幼児期において、母親に対しては安定したアタッチメントを形成し、父親に対して不安定なアタッチメントを形成していた子どもは、成人になるまでに、こ

1) 現所属：高知工科大学

のことに對して何らかの折り合いをつけ、アタッチメントに対するより一般的な表象を形成する（折り合いの付け方によって、アタッチメントに対する心的状態は安定している場合もあれば、不安定な場合もある）。そして、この変化は、まさに児童期における認知発達に伴いスタートするのである。

児童期のアタッチメント研究が数少ない原因の一つは、児童期のアタッチメントの個人差を測定しようとする際に、ゴールドスタンダード（至適基準）ともいべき測度が定まっていなかったためであった。つまり、乳幼児アタッチメント研究におけるストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure；Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）やアタッチメントQソート（Attachment Q-sort；Waters & Deane, 1985）、および、成人アタッチメント研究における成人アタッチメント面接（Adult Attachment Interview, 以下、AAI；George, Kaplan, & Main, 1996）や親密な対人関係体験尺度（Experiences in Close Relationships inventory；Brennan, Clark, & Shaver, 1998）のように、信頼性と妥当性が確認され、かつ多くの研究者が共通して用いる測度が、児童期のアタッチメント研究には、存在していなかった。

しかし、近年、欧米では、質問紙法を用いて、児童期中期におけるアタッチメントの個人差を測定する場合には、カーンズ・セキュリティ・スケール（Kerns Security Scale, 以下 KSS；Kerns, Klepac, & Cole, 1996）とコーピング方略質問紙（Coping Strategies Questionnaire, 以下 CSQ；Finnegan, Hodges, & Perry, 1996）がよく用いられるようになってきた（Dwyer, 2005；Kerns & Seibert, in press）。ちなみに、KSSは「アタッチメントの安定性」（Security）という1因子で、CSQは「とらわれ型コーピング」（Preoccupied coping）と「回避型コーピング」（Avoidant coping）という2因子で、アタッチメントの個人差を測定する。

KSSとCSQは、共に、時間的安定性や予測的妥当性という点では、よい心理測定的属性を備えている。しかし、KSSとCSQの「回避型コーピング」は、母親の応答性（responsiveness）や他のアタッチメント測度（e.g., ドール・プレイ）との関連性という点で妥当性が確認されているが、CSQの「とらわれ型コーピング」は、この点については確認がなされていない。したがって、CSQの「とらわれ型コーピング」については、妥当性の証左が十分得られているとは言えず、さらに、KSSは、通文化的妥当性や弁別的妥当性が確認されているのに対して、CSQは、これらの点が未検討である（Kerns & Seibert, in press）。

以上のことから、日本において、児童期のアタッチメント研究を展開していくためには、まず、KSSの日本語版を早急に作成することが必要不可欠であると考えら

れる。Kerns et al. (1996) は、アタッチメントの安定性を「子どもが母親を、応答的で、利用可能で、そして、コミュニケーションに対してオープンであると認識している程度」(p.458) と操作的に定義した。そのため、KSSの項目は、「(a) 子どもが特定のアタッチメント対象を応答的で、利用可能であると信じている程度 (e.g., 必要なときに、親がそばにいてくれないかもしれない、と子どもが心配しているかどうか)、(b) ストレスを感じたときに、子どもがアタッチメント対象を頼る傾向 (e.g., 動揺したときに、子どもが親のところへ行くかどうか)、(c) 子どもによって報告された、アタッチメント対象とコミュニケーションを行う際の気楽さ・気軽さ、および子どもがアタッチメント対象とのコミュニケーションに関心を持っているかどうか (e.g., 考えていることや気持ちを親に対して伝えることを、子どもが好きかどうか)」(p.459) といった側面を測定できるよう企図されている。また、Kerns et al. (1996) によれば、KSSの適用年齢は、8歳から12歳 (i.e., 小学3年生から小学6年生) である。

この尺度を用いて、欧米では、これまでに、児童期中期においては、母子間のアタッチメントが安定しているほど、学業においてコンピテンスを感じ（ただし、学力そのものとは無関係な場合も多い）、学校適応がよく、自尊心が高く、友人関係の質がよく、建設的な情動制御やコーピングを行い、外在化や内在化といった問題行動が少ないということが明らかになっている（Kerns, 2008）。たとえば、Kerns et al. (1996) は、児童期中期において、母子関係におけるアタッチメントの安定性がピア関係に影響を与えるかどうかを、周囲のピアからの受容度、ピアとの2者関係の質、孤独感という視点から検討した。その結果、母子関係においてアタッチメントが安定している子どもほど、周囲のピアから受容されていて、互恵的な友人関係を持ち、そして、より孤独ではないことが示された。

そこで本研究の目的は、日本語版 KSS を作成し、その信頼性と妥当性を確認することであった。具体的には、KSS を日本語に訳し、小学4年生から6年生に対して実施する。そして本研究では、まず、日本語版 KSS の因子構造が、Kerns et al. (1996) と同様に、1因子だと見なせるかどうかを、サンプル全体に対する因子分析や、男女・学年といった集団を仮定した多母集団同時分析を用いて検討する。次に、日本語版 KSS の信頼性について、内的整合性と再検査信頼性（約3ヶ月）の確認を行う。

さらに、妥当性の確認については、Kerns et al. (1996) においては、KSS と自己を多次的・多面的に捉えることが可能な自己知覚尺度（Harter, 1982）との関連性が検討されていたので、本研究でも、これに類す

る検討を行う。すなわち、改訂・自己知覚尺度児童版(眞榮城・菅原・酒井・菅原, 2007)をKSSと同時に実施し、その下位尺度である「全体的自己価値感」「友人関係評価」「運動能力評価」と日本語版KSSとの関連性を検討する。Kerns et al. (1996)の結果に基づくならば、日本語版KSSは、自己知覚尺度の「全体的自己価値感」や「友人関係評価」と中程度の有意な正の相関があり、「運動能力評価」とは無相関、あるいは、仮に有意な相関があったとしても、その程度は弱いであろう(仮説1)。また、日本語版KSSの予測的妥当性を検討するために、アタッチメントの安定性が、8ヶ月後の共感性、友人関係良好度(友人関係の良さに対する自己認知)、孤独感、問題攻撃性(学級において問題となる攻撃性)を予測し得るかどうかを検討する。先行研究(Kerns et al., 1996; Talebi & Verma, 2007)に従うならば、アタッチメントの安定性は、共感性や友人関係良好度との間には、有意な正の相関があり、孤独感や問題攻撃性との間には有意な負の相関があるであろう(仮説2)。

方 法

調査対象者

調査対象者は、関東の小学校6校(A~F校)の小学4, 5, 6年生970名(平均年齢=10.22歳, $SD=0.98$)であった。調査対象者の内訳は小学4年生307名(男子154名, 女子153名), 小学5年生340名(男子180名, 女子160名), 小学6年生323名(男子165名, 女子158名)であった。本研究では、このうち、後述する主要な養育者を尋ねる項目に、母親と回答した協力者のみを分析対象者とした。

その結果、本研究の分析対象者は、小学4, 5, 6年生848名(平均年齢=10.19歳, $SD=0.86$)となった。分析対象者の内訳は小学4年生261名(男子127名, 女子134名), 小学5年生302名(男子154名, 女子148名), 小学6年生285名(男子139名, 女子146名)であった。

本研究では、8ヶ月の間隔をあけて、2度(うち、再検査信頼性を検討した1校には3度)調査を実施した。第1回調査では、全調査対象者が後述の(1)KSSに、また、A校とB校に在籍する232名(小学4年生67名, 小学5年生77名, 小学6年生88名)は、(1)KSSに加えて(2)改訂・自己知覚尺度児童版に回答した。第2回調査では、A校とB校に在籍する232名(小学4年生, 67名, 小学5年生77名, 小学6年生88名)は(3)児童用多次元共感性尺度に回答した。また、C校とD校に在籍する253名(小学4年生82名, 小学5年生91名, 小学6年生80名)は(4)対友人関係認知尺度および(5)短縮版孤独感尺度に回答した。さらに、別のE校とF

校に在籍する363名(小学4年生112名, 小学5年生134名, 小学6年生117名)は(6)問題攻撃性尺度に回答した。加えて、KSSの再検査信頼性を確認するために、C校の小学生76名(4年生27名, 5年生26名, 6年生23名)には、第1回調査から約3ヶ月後に再度、KSSに回答してもらった。

調査内容

基本属性として、まず、学年と性別、年齢を尋ねた。続いて、主要な養育者を尋ねる項目に回答を求めた。第1回調査および第2回調査では、上述した組み合わせ通り、(1)から(6)のいずれかの尺度を実施した。

主要な養育者を尋ねる項目 「おうちの中であなたを育ててくれている大人の人はだれですか」と問い、「お母さん、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃん、その他」の中から1人を選択してもらった。その結果、この主要な養育者を尋ねる項目への回答度数は、母親848(87.4%), 父親65(6.7%), 祖母25(2.6%), 祖父4(0.4%), その他11(1.1%), 記述なし17(1.8%)であった。

(1)日本語版カーンズ・セキュリティ・スケール(KSS: Kerns Security Scale) KSSは、初出のKerns et al. (1996)では数項目のみが項目例として紹介されるに止まっていたが、Kerns, Aspelmeier, Gentzler, & Grabill (2001)では、付録Aにおいて全項目が公開されていた。本研究では、著者と連絡を取りつつ、Kerns et al. (2001)に基づきながら、以下の3つのステップで、日本語版KSSの作成を行った。

第1ステップとしては、第1著者が、原作者の許可を得た上で、近藤ほか(2004)が既に開発していた「低学年向けKSS」を踏まえながら、「中・高学年向けのKSS」の日本語訳草案を作成した。より詳細に述べると、KSSの適用年齢は、本来、8歳から12歳であるが、近藤ほか(2004)は、研究プロジェクトの一環として小学1・2年生におけるアタッチメントの安定性を測定する必要性があった。そのため、近藤ほか(2004)は、バックトランスレーションの手続きを経ながら同じKSSに対して日本語訳を行ったが、KSSの内容を小学1・2年生でも理解しやすいように、実施形態を、紙芝居を用いた個別面接へと変更し、KSS項目の日本語訳についてもところどころ意識せざるを得なかった²⁾。しかし、必要な手続きを経て、低学年向けの日本語版KSSは既に開発および学会発表をされていたので、本研究では、この測度を踏まえて、KSSの本来の適用年齢である中・高学年を念頭において、原文の表現やニュアンスにできるだけ忠実な日本語訳草案を作成した。

第2ステップとしては、中学校英語教諭1名(教職歴

2) 近藤清美, 私信, 2012年8月。

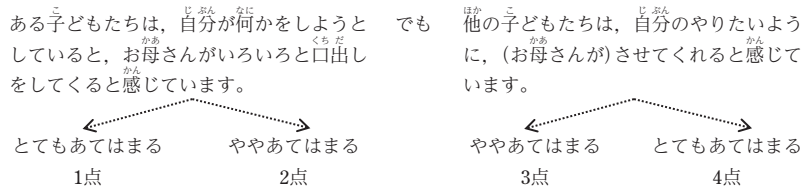


Figure 1 日本語版 KSS の質問項目例 (項目 2) およびその得点算出方法

18年), 高校英語教諭 1 名 (教職歴 11 年), アタッチメント研究を実施したことのある大学教員 5 名・大学院生 1 名 (重複してカウントすると, 海外での留学経験あり 3 名, AAI のコーダー資格取得者 3 名, 臨床心理士 3 名) に, 日本語と英語のニュアンスが一致しているかどうかを確認してもらった。そして, 得られた意見に基づき, 必要に応じて原著者に確認を取りながら, 第 1 著者が日本語訳の修正を行った。

第 3 ステップとしては, 授業が全て英語で行われる大学を卒業し, 翻訳の仕事を経験したこともある臨床心理士が, KSS の日本語訳を英語に翻訳した。そして, 母国語が英語のカウンセラー 1 名が, その英語と元の英語原文のニュアンスの異同を確認した。最後に, 第 2 著者が調査協力校の小学校教諭 4 名に, 日本語らしさや, 文言を小学生が理解できるかどうか, などの確認を行い, 第 1 著者と共に修正を行った。

KSS は, 社会的望ましさの影響を低減するために, Figure 1 に示したような「ある子どもたちは…、でも、他の子どもたちは…」という形式をとる。調査対象者は, 設問を左から右へと読み, はじめに, 対になる二つの記述から自分に似ている選択肢を選び, 次に, それが“とてもあてはまる”か“ややあてはまるか”を回答する。得点化は Kerns et al. (1996) に従い, 4 件法で行った。たとえば, Figure 1 に示した項目 2 では, 得点は左側から順に 1 点, 2 点, 3 点, 4 点であった。

KSS の項目数は 15 である (具体的な項目内容や得点化の方法などについては, Appendix を参照のこと)。なお, 原尺度では項目内で「お母さん」という表現を用いているが, 本研究では, 母親がいない児童への倫理的配慮から, 「お母さん」という文言を「おうちの人」へと変更した「おうちの人バージョン」を用いた。具体的には, 主要な養育者を尋ねる項目への回答を求めた後で, 「これから『おうちの人』ということばが出てきたら, あなたが, 前の質問で○をつけた人のことを思いうかべて, 以下の質問に答えてください」と教示した。そして, 分析においては, 上述の主要な養育者を尋ねる質問で「お母さん」を選択した児童 848 名のみをその対象とした。

(2) 改訂・自己知覚尺度児童版 自己を多次元・多面的に捉えることが可能な「改訂・自己知覚尺度児童版」(眞榮城ほか, 2007) から, 「全体的自己価値」6 項目, 「友人関係評価」6 項目, 「運動能力評価」6 項目の 3 下位尺度 (計 18 項目) を抜粋し, 使用した。この尺度は, 使用に際して著者への問い合わせが必要であったため, 著者に連絡の後, 使用許可を得た。得点が高いほど, 「全体的自己価値」では自己に対する全体的・全般的な自己評価が高く, 「友人関係評価」では友人関係における自己評価が高く (e.g., 友だちが多い, 自身は友だちから人気がある), 「運動能力評価」では運動能力に対する自己評価が高い。回答方法は, “あてはまる (4 点)” から “あてはまらない (1 点)” までの 4 段階であった。改訂・自己知覚尺度児童版の信頼性と妥当性は, 眞榮城ほか (2007) で確認されている。

(3) 児童用多次元共感性尺度 児童用多次元共感性尺度 (長谷川・堀内・鈴木・佐渡・坂元, 2009) から, 「共感的関心」7 項目と「視点取得」9 項目の 2 下位尺度 (計 16 項目) を抜粋し, 使用した。回答方法は, “あてはまる (5 点)” から “あてはまらない (1 点)” までの 5 段階であった。児童用多次元共感性尺度の信頼性と妥当性は, 長谷川ほか (2009) で確認されている。

(4) 対友人関係認知尺度 友人関係の良好さに対する自己認知 (友人関係良好度) を測定するために, 山本・仲田・小林 (2000) の対友人関係認知尺度 4 項目を使用した。本尺度は, 本来, 友人関係を良好と捉えているほど, 得点が低く算出されるが, 本研究では, 結果の解釈を容易にするために逆転処理を施し, 調査対象者には, “あてはまる (5 点)” から “あてはまらない (1 点)” までの 5 段階で回答を求めた。この対人関係認知尺度は, 小学生や中学生において, ストレス反応 (e.g., 身体的反応, 抑うつ・不安) や学校享受感 (学校を楽しんでいる程度) との間で関連性が示されており (山本ほか, 2000), 友人関係良好度を測定する尺度としての妥当性は得られていると考えられる。

(5) 短縮版孤独感尺度 Asher, Hymel, & Renshow (1984) が開発し, 井上・高橋 (2000) が日本語訳した孤独感尺度の中から 10 項目を抜粋して使用した。オリ

ジナルの孤独感尺度 (Asher et al., 1984) は、孤独感や社会的不満について尋ねる 16 項目と、フィラー 8 項目の計 24 項目から構成されていた。回答方法は、“いつもそう (5 点)” から “ぜんぜんそうでない (1 点)” までの 5 段階であった。井上・高橋 (2000) において、本邦の児童を対象とした場合でも、オリジナルの孤独感尺度 (Asher et al., 1984) は、内的整合性が高く、そして対人関係に対して関心が低い児童は、この尺度の得点が高いことが示されている。

本研究では、Kerns et al. (1996, p.459) と同様に、友人からの受容度ではなく主に孤独感を捉えているであろうと考えられる 5 項目とフィラー項目 5 項目の計 10 項目を抜粋して使用した。その理由は、短縮版孤独感尺度と対友人関係認知尺度 (山本ほか, 2000) との概念的重なり・異同をできるだけ明確にするためである。

(6) 問題攻撃性尺度 村上・福光 (2005) の問題攻撃性尺度 13 項目を使用した。この尺度は、得点が高いほど学級において問題となる攻撃性が高いことを示し、学級において攻撃性の問題が著しい児童 (i.e., 担任教師が「学級運営上問題がある」、あるいは、「これから気にかけていけないといけない」と考えている児童) とそうでない児童と識別し得る尺度である。回答方法は “はい (1 点)” と “いいえ (0 点)” の 2 段階であった。問題攻撃性尺度の信頼性と妥当性は、村上・福光 (2005) で確認されている。

調査手続きおよび倫理的配慮

調査は各学級担任に依頼し、学級ごとに集団状況で実施された。調査は無記名方式で、学年および性別をフェースシートに記入してもらった。また、第 1 回調査と第 2 回調査のデータおよび第 1 回調査と再検査調査のデータ照合のため、出席番号の記述を求めた。本調査は、大学での研究の一環であり、答えた内容が先生や友だちあるいは家族にもれることは絶対にならないこと、調査への参加および中断は自由であること、学業成績とは無関係であり、回答によって不利益をこうむることがないこと、をフェースシートに明記するとともに、質問紙を配布した後に担任教師より教示してもらった。1 つの調査あたりの実施時間は約 20 分であった。

調査時期

第 1 回調査は 2013 年の 7 月上旬に実施した。第 2 回調査は 2014 年の 3 月上旬に実施した。再検査信頼性確認のための 2 度目の調査は、2013 年の 10 月上旬に実施した。

結果と考察

本研究の分析には、IBM SPSS Statistics (ver. 21.0) および Amos (ver.19.0) を使用した。

Table 1 日本語版 KSS の主成分分析・確認的因子分析結果

項目番号	主成分負荷量		確認的因子分析	
	15 項目	14 項目	15 項目	14 項目
*項目 9	.77	.75	.75	.75
項目 12	.73	.71	.71	.71
項目 8	.69	.66	.67	.66
項目 11	.66	.62	.62	.62
項目 5	.66	.62	.62	.62
*項目 15	.66	.62	.62	.62
*項目 10	.64	.61	.61	.61
項目 14	.64	.60	.60	.60
*項目 3	.62	.57	.57	.57
*項目 1	.59	.54	.54	.54
*項目 13	.58	.54	.53	.54
*項目 4	.53	.48	.48	.48
項目 6	.44	.40	.40	.40
項目 2	.38	.34	.34	.34
項目 7	.13	—	.11	—

注. KSS はカーンズ・セキュリティ・スケールの略である。また、*は逆転項目である。項目の具体的な内容については、Appendix に示した。

日本語版 KSS の尺度構成

KSS は、Kerns et al. (1996) によって 1 次元構造が仮定されている。そこで日本語版 KSS に対して、成分数を 1 に設定し、主成分分析を行ったところ、1 項目 (項目 7) の主成分負荷量が著しく低かったため、その項目を除外し、再度、主成分分析を行った (Table 1)。その結果、第 1 主成分に対する寄与率は、38.66% であり、いずれの項目においても、第 1 主成分に対する主成分負荷量は .30 以上であった。次に、日本語版 KSS の因子構造を検討するために最尤法による確認的因子分析を行った。想定されるモデルは、Kerns et al. (1996) で示された 1 因子モデルであった。まず、日本語版 KSS15 項目について 1 因子モデルに基づき、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は、 $\chi^2(90)=434.011(p<.05)$, GFI=.933, AGFI=.911, CFI=.905, RMSEA=.067, AIC=494.011, CAIC=666.298 であり、一定の適合度が確認された。ただし、主成分分析の結果と同様に、1 つの項目 (項目 7) の負荷量が著しく低いことが示されたため、その 1 項目を除外して、再度、構造方程式モデリングによる確認的

Table 2 日本語版 KSS の全調査対象者、性別、学年別の記述統計量

	全体	4年生	5年生	6年生	主効果					
					性別		学年		交互作用	
					<i>df</i> =1, 842		<i>df</i> =2, 824		<i>df</i> =2, 842	
					<i>F</i> 値	η^2	<i>F</i> 値	η^2	<i>F</i> 値	η^2
<i>M</i>	3.17	3.21	3.19	3.12						
男子 <i>SD</i>	0.54	0.53	0.52	0.58						
<i>n</i>	420	127	154	139						
<i>M</i>	3.21	3.32	3.16	3.18	1.547	.00	3.504*	.01	1.158	.00
女子 <i>SD</i>	0.56	0.51	0.60	0.56						
<i>n</i>	428	134	148	146						
<i>M</i>	3.19	3.27	3.17	3.15						
全体 <i>SD</i>	0.55	0.52	0.56	0.57	—	—	—	—	—	—
<i>n</i>	848	261	302	285						

* $p < .05$

因子分析を行った (Table 1)。その結果、1項目を除外した1因子モデルにおける適合度指標は、 $\chi^2(77) = 314.123$ ($p < .05$), $GFI = .949$, $AGFI = .930$, $CFI = .933$, $RMSEA = .060$, $AIC = 370.123$, $CAIC = 530.923$ であり、十分な適合度が確認された。なお、日本語版 KSS においては、全項目 (15項目) と項目7を除外した14項目との間の相関は $r = .98$ ($p < .01$) であった。

日本語版 KSS が、男児と女児で同様の因子構造を有しているかどうかを確認するために、多母集団同時分析を行った。1項目を除外した1因子モデルにおいて、因子構造は同じだが、潜在変数から観測変数への係数が男児と女児で異なることを想定したモデル (配置不変モデル) と、因子構造は同じで、かつ、係数が等値と見なすことができるモデル (測定不変モデル) を作成し、AIC (Akaike Information Criterion) および BCC (Brown-Cudeck Criterion) でモデルの比較を行った。配置不変モデルの適合度は、 $\chi^2(154) = 411.491$ ($p < .05$), $GFI = .935$, $AGFI = .911$, $CFI = .928$, $RMSEA = .044$, $AIC = 523.491$, $BCC = 527.609$ であった。測定不変モデルの適合度は、 $\chi^2(168) = 435.039$ ($p < .05$), $GFI = .931$, $AGFI = .914$, $CFI = .926$, $RMSEA = .043$, $AIC = 519.039$, $BCC = 522.127$ であった。AIC の値、および BCC の値は測定不変モデルの方が低く、測定不変モデルが採用された。

日本語版 KSS が、4年生、5年生、6年生で同様の因子構造を有しているかどうかを確認するために、多母集団同時分析を行った。1項目を除外した1因子モデルにおいて、先ほどと同様に、配置不変モデルと測定不変モ

デルを作成し、AIC および BCC でモデルの比較を行った。配置不変モデルの適合度は、 $\chi^2(231) = 531.549$ ($p < .05$), $GFI = .918$, $AGFI = .888$, $CFI = .917$, $RMSEA = .039$, $AIC = 699.549$, $BCC = 709.040$ であった。測定不変モデルの適合度は、 $\chi^2(259) = 584.910$ ($p < .05$), $GFI = .910$, $AGFI = .890$, $CFI = .910$, $RMSEA = .039$, $AIC = 696.910$, $BCC = 703.239$ であった。AIC の値、および BCC の値は測定不変モデルの方が低く、測定不変モデルが採用された。

以上の結果から日本語版 KSS は1次元 (1因子) 構造であると見なすことができ、その構造は男女や学年にかかわらず同じであることが示唆された。

日本語版 KSS の記述統計量および性差・学年差

Kerns et al. (1996) に基づき、項目7以外の14項目を加算平均し、日本語版 KSS の尺度得点を算出した。調査対象者全体、性別、学年別の平均値と標準偏差については、Table 2 に示した。日本語版 KSS の尺度得点について、性差ならびに学年進行による量的変化を検討するため、2 (性別：男児・女児) \times 3 (学年：4年生、5年生、6年生) の2要因分散分析を行った。これら2要因は、調査対象者間要因であった。その結果、交互作用項は有意でなかった ($F[2, 842] = 1.158$ ($p > .05$), $\eta^2 = .00$)。また、性別の主効果も有意でなかった ($F[1, 842] = 1.547$ ($p > .05$), $\eta^2 = .00$)。一方、学年の主効果は有意であり ($F[2, 842] = 3.504$ ($p < .05$), $\eta^2 = .01$)、多重比較 (Tukey の HSD 検定) の結果、4年生は、6年生に比べて、日本語版 KSS の得点が有意に高かった。

Table 3 日本語版 KSS の妥当性検討のために用いた尺度の記述統計量

尺度名	下位尺度名	件法	M	SD	α	n
改訂・自己知覚尺度児童版 ¹⁾	全体的自己価値感	4	2.80	0.68	.81	231
	友人関係評価	4	2.92	0.61	.64	231
	運動能力評価	4	2.44	0.66	.74	231
児童用多次元共感性尺度	共感的関心	5	3.62	0.74	.76	228
	視点取得	5	3.75	0.65	.73	228
対友人関係認知尺度	友人関係良好度	5	3.98	0.83	.84	248
孤独感尺度	孤独感	5	1.58	0.73	.84	248
問題攻撃性尺度	問題攻撃性	2	0.48	0.23	.70	354

¹⁾ 改訂・自己知覚尺度児童版の友人関係評価は、オリジナルは6項目であったが、本研究では、2項目を除いた4項目を用いた。

日本語版 KSS の信頼性の検討

日本語版 KSS の内的整合性を検討するために尺度の α 係数を算出した。その結果、KSS の α 係数は .85 であり、十分な内的整合性が確認された。また、4 年生では .83、5 年生では .85、6 年生では .87 であり、各学年においても内的整合性が確認された。

次に再検査信頼性を検討するために、3 ヶ月の間隔をあけた検査・再検査間の相関係数を算出した。その結果、十分な再検査信頼性係数が得られた ($r = .62, p < .01, n = 76$)。また、学年別の結果については、5 年生では値がやや低くなるものの、4 年生や 6 年生においては十分な再検査信頼性係数が得られた (4 年生: $r = .65, p < .01, n = 27$, 5 年生: $r = .51, p < .01, n = 26$, 6 年生: $r = .76, p < .01, n = 23$)。

以上のことから、日本語版 KSS は一定の信頼性を備えていることが確認されたと考えられる。

日本語版 KSS の妥当性の検討

妥当性を検討するための尺度 (i.e., 改訂・自己知覚尺度児童版, 児童用多次元共感性尺度, 対友人関係認知尺度, 短縮版孤独感尺度, 問題行動尺度) について α 係数を算出した。本研究では、改訂・自己知覚尺度児童版の友人関係評価 6 項目については、 α 係数が .48 と低かったため、 α 係数を下げている 2 項目 ([もっと多くの友だちがほしいと思う] と [もっとたくさんのおなじ学年の友だちが自分のことを好きでいてくれたらいいのに、と思う]) を削除して使用することにした。その結果、妥当性を検討するための尺度の α 係数は、 $\alpha = .64 - .84$ となり、一定の内的整合性が確認された。改訂・自己知覚尺度児童版は眞榮城ほか (2007)、児童用多次元共感性尺度は長谷川ほか (2009)、短縮版孤独感尺度は Asher et al. (1984) や Kerns et al. (1996)、対友人関係認知尺度は山本ほか (2000)、問題攻撃性尺度は村上・

福光 (2005) に従い、それぞれの尺度の尺度得点 (加算平均得点) を算出した (Table 3)。

次に、仮説 1 を検討するために、日本語版 KSS の得点と第 1 回調査で測定した改訂・自己知覚尺度児童版の全体的自己価値感得点、友人関係評価得点、運動能力評価得点との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、日本語版 KSS の得点は、全体的自己価値感得点や友人関係評価得点との間に有意な正の相関があった。また、日本語版 KSS の得点は、運動能力評価得点との間でも有意な正の相関がみられたが、その関連性は必ずしも強くはなかった。したがって、仮説 1 は支持され、日本語版 KSS には一定の収束的および弁別的妥当性があることが示されたと考えられる。

仮説 2 を検討するために、日本語版 KSS と第 2 回調査で測定した児童用多次元共感性尺度の共感的関心得点、視点取得得点、短縮版孤独感尺度の孤独感得点、対友人関係認知尺度で測定される友人関係良好度得点および問題攻撃性尺度の問題攻撃性得点との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、日本語版 KSS の得点は、共感的関心得点、視点取得得点、友人関係良好度得点との間に有意な正の相関がみられ、孤独感得点や問題攻撃性得点との間に有意な負の相関が得られた。したがって、仮説 2 は支持され、日本語版 KSS には予測的妥当性があることが示されたと考えられる。

以上のことから、日本語版 KSS は一定の妥当性を備えていることが確認されたと考えられる。

今後の課題

上記の結果全てを整理すると、日本語版 KSS は、児童期中期のアタッチメントの安定性を測定する上で、十分な信頼性 (内的整合性, 再検査信頼性) と妥当性 (収束的妥当性, 弁別的妥当性, 予測的妥当性) を兼ね備えた尺度であるといえる。最後に、今後の課題について述

Table 4 日本語版 KSS と妥当性検討のための尺度との間の相関係数

尺度名	下位尺度名	n	KSS
改訂・自己知覚尺度児童版	全体的自己価値感	231	.54**
	友人関係評価	231	.37**
	運動能力評価	231	.16*
児童用多次元共感性尺度	共感的関心	228	.23**
	視点取得	228	.20**
対友人関係認知尺度	友人関係良好度	247	.23**
孤独感尺度	孤独感	248	-.20**
問題攻撃性尺度	問題攻撃性	354	-.23**

* $p < .05$, ** $p < .01$

べるが、これらの点については、今後も継続して検討していく必要がある。

第1の課題は、KSS 得点の性差および学年差についてである。本研究では、KSS 得点において性差はなかったが、いくつかの研究 (e.g., Kerns et al., 1996; Verschueren & Marcoen, 2005) では、女兒は男児に比べて KSS 得点が有意に高いという結果が得られている。また、本研究では、学年差について、効果量は小さいものの、4年生の KSS 得点は、6年生の KSS 得点に比べて有意に高いという結果が得られた。しかし、本研究と同様の傾向は、Kerns, Tomich, Aspelmeier, & Contreras (2000) ではみられるものの、Verschueren & Marcoen (2005) では、逆に、11歳児は、8歳児に比べて、KSS 得点が有意に高いことが示されている。これらの点については、比較文化の視点を考慮しながら、今後もさらなる検討が必要であろう。

第2の課題は、KSS の適用年齢についてである。Kerns et al. (1996) は、KSS の適用年齢を8歳から12歳 (小学3年生から小学6年生) と設定しているが、Nickerson, Mele, & Princiotta (2008) は、KSS の適用年齢の上限を14歳 (中学2年生) だと考えている。また、KSS を3年生に対して実施した場合には、 α 係数 (内的整合性) は0.64 と他の学年に比べて低くなる (Kerns et al., 2000)。したがって、KSS は小学校高学年 (小学4年生から小学6年生) のアタッチメントの安定性を測定する上では非常に有用な尺度であるが、小学校低学年および中学生への適用については、今後もさらなる検討が必要であろう。

文 献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of*

the strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
 Asher, S. R., Hymel, S., & Renshaw, P. D. (1984). Loneliness in children. *Child Development*, *55*, 1456-1464.
 Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
 Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: Guilford Press.
 Cassidy, J. (2008). The nature of the child's ties. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (2nd ed., pp.3-22). New York: Guilford Press.
 Dwyer, K. M. (2005). The meaning and measurement of attachment in middle and late childhood. *Human Development*, *48*, 155-182.
 Finnegan, R. A., Hodges, E. V. E., & Perry, D. G. (1996). Preoccupied and avoidant coping during middle childhood. *Child Development*, *67*, 1318-1328.
 George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1996). *Adult Attachment Interview protocol* (3rd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
 Harter, S. (1982). The perceived competence scale for children. *Child Development*, *53*, 87-97.
 長谷川真里・堀内由樹子・鈴木佳苗・佐渡真紀子・坂元章. (2009). 児童用多次元共感性尺度の信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, *17*, 307-310.
 本多潤子. (2002). 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成. *カウンセリング研究*, *35*, 246-255.
 井上まりこ・高橋恵子. (2000). 小学生の対人関係の類型と適応: 絵画愛情関係テスト (PART) による検

- 討. *教育心理学研究*, **48**, 75-84.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (編著). (2005). *アタッチメント：生涯にわたる絆*. 京都：ミネルヴァ書房.
- Kerns, K.A. (2008). Attachment in middle childhood. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (2nd ed., pp.366-382). New York: Guilford Press.
- Kerns, K.A., Aspelmeier, J.E., Gentzler, A.L., & Grabill, C.M. (2001). Parent-child attachment and monitoring in middle childhood. *Journal of Family Psychology*, **15**, 69-81.
- Kerns, K.A., Klepac, L., & Cole, A.K. (1996). Peer relationships and preadolescents' perceptions of security in the child-mother relationship. *Developmental Psychology*, **32**, 457-466.
- Kerns, K.A., & Richardson, R.A. (Eds.) (2005). *Attachment in middle childhood*. New York: Guilford Press.
- Kerns, K.A., & Seibert, A.C. (in press). Finding your way through the thicket: Promising approaches to assessing attachment in middle childhood. In E. Waters, B. Vaughn, & H. Waters (Eds.), *Measuring attachment*, New York: Guilford Press.
- Kerns, K.A., Tomich, P.L., Aspelmeier, J.E., & Contreras, J.M. (2000). Attachment-based assessments of parent-child relationships in middle childhood. *Developmental Psychology*, **36**, 614-626.
- 近藤清美・安田 純・北村真知子・甲田菜穂子・金澤忠博・鎌田次郎・南 徹弘・糸魚川直祐. (2004). 超低出生体重児の学齢期における心理・行動 その41 アタッチメントと母親の安全基地提供. *日本心理学会第68回大会発表論文集*, 1018.
- 眞築城和美・菅原ますみ・酒井 厚・菅原健介. (2007). 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成：児童版・青年版・大学生版を対象として. *心理学研究*, **78**, 182-188.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1-2, Serial No. 209), 66-104.
- 松浦ひろみ・北川 恵. (2010). 児童期後期における愛着表象の投影的測定法：親子関係質問紙及び教師による対人行動評定との関連. *京都女子大学発達教育学部紀要*, **6**, 73-79.
- 村上宣寛・福光 隆. (2005). 問題攻撃性尺度の基準関連の構成とアサーション・トレーニングによる治療的介入. *パーソナリティ研究*, **13**, 170-182.
- 村上達也・櫻井茂男. (2010). 児童期のアタッチメント対象の把握：Function Basedアプローチによる検討. *筑波大学心理学研究*, **40**, 51-59.
- 村上達也・櫻井茂男. (2014). 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討：児童用アタッチメント機能尺度を作成して. *教育心理学研究*, **62**, 24-37.
- Nickerson, A.B., Mele, D., & Princiotta, D. (2008). Attachment and empathy as predictors of roles as defenders or outsiders in bullying interactions. *Journal of School Psychology*, **46**, 687-703.
- Talebi, B.Z., & Verma, P. (2007). Aggression and attachment security. *Iranian Journal of Psychiatry*, **2**, 72-77.
- 豊田賀子. (2011). 児童期における情動調整と愛着スタイル：相手との関係性に着目して. *明治学院大学心理学紀要*, **21**, 37-49.
- Verschueren, K., & Marcoen, A. (2005). Perceived security of attachment to mother and father: Developmental differences and relations to self-worth and peer relationships at school. In K.A. Kerns & R.A. Richardson (Eds.), *Attachment in middle childhood* (pp.212-230). New York: Guilford Press.
- Waters, E., & Deane, K.E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-sort methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50** (1-2, Serial No. 209), 41-65.
- Waters, E., Kondo-Ikemura, K., Posada, G., & Richters, J.E. (1991). Learning to love: Mechanisms and milestones. In M. Gunnar & L.A. Sroufe (Eds.), *Minnesota symposium on child psychology: Vol.23, Self-processes in early development* (pp.217-255). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸. (2000). 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連：学校不適応予防の視点から. *カウンセリング研究*, **33**, 235-248.

付記

本研究は、2015 Society for Research in Child Development Biennial Meeting (フィラデルフィア)において発表を行いました。カーズ・セキュリティ・スケール(KSS)の日本語版作成については、Kathryn A. Kernsより許可を得ました。日本語版KSS項目の掲載に関しては、American Psychological Associationより許可を得ました。日本語版KSSについての問い合わせは、中尾達馬 (tatsuma@edu.u-yukyuu.ac.jp) あるいは村上達也

(t-mrkm@human.tsukuba.ac.jp) まで。

KSS の日本語版作成にご協力下さいました数井みゆき先生、北川 恵先生、金政祐司先生、工藤晋平先生、義田俊之先生、梅村比丘さん、松本大進さん、Techong

Singeo さん、友寄ゆかりさん、知念秀明さん、下條大貴さんに心より感謝申し上げます。また、調査にご協力下さいました小学校の校長先生、担任の先生、子どもたちに、謝意を表します。

Nakao, Tatsuma (Faculty of Education, University of the Ryukyus) & Murakami, Tatsuya (Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba). *Measuring Attachment Security in Middle Childhood: Construction of a Japanese Version of the Kerns Security Scale (KSS)*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2016, Vol.27, No.1, 72-82.

This research adapted into Japanese the Kerns Security Scale (KSS), which assesses attachment security in middle childhood. Participants were 420 boys and 428 girls in grades 4-6 (mean age=10.2 years). It examined whether the Japanese KSS could be assumed to be based on one factor regardless of gender or grade. We verified the reliability of the KSS with tests of internal consistency and test-retest correlation at 3 months, and also examined the validity of the KSS in the two ways. First, correlations between the KSS and the Self-Perception Profile (i.e., global self-esteem, social competence, and athletic competence) were conducted to determine whether they were theoretically related or unrelated to attachment security. Second, the KSS was utilized to predict empathy, friendship satisfaction, loneliness, and aggression after 8 months. The results supported our hypotheses. In sum, the Japanese version of the KSS appears to have adequate psychometric properties of validity and reliability.

[Keywords] Attachment security, Middle childhood, KSS Japanese Version, Reliability, Validity

2015.4.20 受稿, 2015.11.4 受理

Appendix 日本語版 KSS の項目内容

項目 No	項目内容	項目内容
*1	ある子どもたちにとっては、お母さんを信らいすることは、簡単なことです。	でも 他の子どもたちは、お母さんを信らいしていかどうか分かりません。
2	ある子どもたちは、自分が何かをしようとしていると、お母さんがいろいろと口出しをしてくと感じています。	でも 他の子どもたちは、自分のやりたいように、(お母さんが) させてくれると感じています。
*3	ある子どもたちにとっては、助けが必要なときに、お母さんをあてにする(たよりにする)ことは、簡単なことです。	でも 他の子どもたちは、お母さんをあてにすることができない(たよりにすることができない)、と思っています。
*4	ある子どもたちは、お母さんが十分な時間、いっしょに過ごしてくれている、と思っています。	でも 他の子どもたちは、お母さんがいっしょに過ごしてくれる時間が十分ではない、と思っています。
5	ある子どもたちは、お母さんに自分の考えや気持ちを伝えることが、あまり好きではありません。	でも 他の子どもたちは、お母さんに自分の考えや気持ちを伝えることが、大好きです。
6	ある子どもたちは、お母さんを必要だと思うことがあまりありません。	でも 他の子どもたちは、多くのことでお母さんを必要だと思っています。
7	ある子どもたちは、お母さんと、もっといっしょにいたいなあ、と思っています。	でも 他の子どもたちは、じゅうぶん、お母さんといっしょにいることができていると思っています。
8	ある子どもたちは、お母さんが、本当は自分のことを好きではないかもしれない、と心配しています。	でも 他の子どもたちは、お母さんが、自分のことを好きだと、 強く 、心から思っています。
*9	ある子どもたちは、お母さんが自分のことを、本当に分かってくれていると感じています。	でも 他の子どもたちは、お母さんが自分のことを、あまり分かってくれていないと感じています。
*10	ある子どもたちは、お母さんが自分をおいてどこかに行ってしまうことはない(自分を見捨てることはない)、と強く心から思っています。	でも 他の子どもたちは、ときどき、お母さんが自分をおいてどこかに行ってしまうのではないかと(自分を見捨てるのではないかと)、と思っています。
11	ある子どもたちは、必要なときに、お母さんが自分のそばにいてくれないうかもしれない、と心配しています。	でも 他の子どもたちは、お母さんが、必要なときには自分のそばにいてくれる、と信じています。
12	ある子どもたちは、お母さんが、自分の言うことに耳をかたむけてくれない(自分の話をきちんと聞いてくれない)と思っています。	でも 他の子どもたちは、お母さんが、自分の言うことに耳をかたむけてくれる(自分の話をきちんと聞いてくれる)と思っています。
*13	ある子どもたちは、おこったり、悲しくなったりしたときに(気持ちが落ち着かないときに)、お母さんのところへ行きます。	でも 他の子どもたちは、おこったり、悲しくなったりしたときに(気持ちが落ち着かないときに)、お母さんのところへ行きません。
14	ある子どもたちは、困ったときに、お母さんがもっと助けてくれればいいのになあ、と思っています。	でも 他の子どもたちは、お母さんが、自分のことを十分に助けてくれていると思っています。
*15	ある子どもたちは、お母さんがそばにいても、あまり気持ちが落ちつきません。	でも 他の子どもたちは、お母さんがそばにいても、あまり気持ちが落ちつきません。

注1. This material originally appeared in English as Appendix A (adapted), p.81, from Kerns, K.A., Aspelmeier, J.E., Gentzler, A.L., & Grabill, C.M. (2001). Parent-child attachment and monitoring in middle childhood. *Journal of Family Psychology, 15*(1), 69-81. <http://dx.doi.org/10.1037/0893-3200.15.1.69>. Copyright © 2001 by the American Psychological Association. Translated and reproduced [or Adapted] with permission. The American Psychological Association is not responsible for the accuracy of this translation. This translation cannot be reproduced or distributed further without prior written permission from the APA. [本表は、Kerns et al. (2001, p.81) の Appendix A に基づき作成された。APA (American Psychological Association) の許可を得て掲載されているが、APA はこの翻訳の正確性については、責任を負わない。日本語版 KSS 項目は、APA の許可なしに転載・配布をしてはならない(主たる部分のみを著者が翻訳)]

注2. *は逆転項目である。実施に際しては、全ての漢字にふりがなを振って実施した。項目8の右側の文章における「強く」については、オリジナルの KSS では下線を用いて、日本語版 KSS では下線と太字を用いて強調してある。

注3. 教示は、以下の通りであった：この質問では、お母さんと一緒にいるとき、あなたはどんな子なのか、どんなことをしているのか、どんな気持ちになるのか、について質問します。それぞれの質問では、「ある子どもたちは、…、でも、他の子たちは、…」というように「ある子どもたち」と「他の子どもたち」が登場します。あなたに似ているのは、どちらの子どもたちですか。はじめに、どちらの子どもたちがあなたに似ているのかを決めて、右側か左側の文章を1つ、マルで囲んでください。次に、選んだ子どもたちの特ちょうが、あなたに、とてもあてはまるのか、ややあてはまるのか、どちらか1つにマルをつけてください。それぞれの質問では、合計2つ、マルをつけてください。もちろん、どちらの子どもたちの方がよい、悪いということはありません。ですので、あなたが思うように答えてください。

オリジナルの KSS は「右側か左側の文章を1つ選んだ後で、とてもあてはまるか、ややあてはまるかのどちらか1つに○をつける」という教示であるが日本語版 KSS では調査対象者が答えやすいように「2つ○をつける」という形式をとった。

注4. 本研究では、倫理的な配慮から、母親バージョンではなく、おうちの人バージョンを実施した。つまり、調査対象者に、主要な養育者を尋ねる項目を実施し、KSS の各項目で登場する「お母さん」を「おうちの人」へと変更して調査を実施した。